

## 現代「山岳修行」の旅

井戸聡

「お金がないから…」

と懐具合を理由に夏のゼミ旅行への参加を渋る学生。

学生の置かれた状況もわからないではない。

長期の休みにはさまざまなイベントがあってそのための出費があるだろうし、余分な出費がかさめば、そのためのバイトを増やさなければならない。

それでも参加を勧めたのは、奈良県の山奥での「山岳修行」の旅であった（山奥の村…、修行…、若者の食指が動かない理由はここにあるのかもしれない…）。

旅とはいいながらも、現地での聞き取り調査体験も兼ねているため、純粋な観光とはいえないところもあるのだが（これが気乗りしない本当の理由かも…）。

訪れた先は、山岳修行の聖地といわれる大峰山系のお膝元、洞川という山あいの小さな集落だった。ここより先は、役行者が籠って修行をしたと伝えられる峻険な霊峰のそびえる一帯であり、この集落が最奥の人里である。

古来、都人が落ち逃れる先の定番のひとつが、奈良吉野であったが、この洞川という集落は吉野からさらに山深く分け入ったところにある。

だが、この集落はかつて繁栄し、人々が押し寄せた地なのである。

聖地・大峯へと修行に訪れる行者たちの一大修験基地として栄えてきた歴史をもっているのだ。それはそんなに遠い昔の話ではなく、数十年前まではそうであったそう。

ところ狭しと並び立つ古びた旅館の数々が、往時の面影を残している。

以前は行者講といって、修験者が集団で訪れ、旅館の大部屋で雑魚寝し、大いに賑わった。

しかし、「かつての行者講の活気は失われてしまった…」と寺の住職。

取り残され寂れた山奥の村。

たしかに行者の姿はまばらだった。かわりに目についたのは、陸上部らしき中高生の一団。涼しい気候と澄んだ空気、ある程度の標高がトレーニン



コンビニ（らしき）ものもある  
（注：某〇AWSONではない）

グに適しているのだろう（これもあるイミで「修行」か、と納得）。

そして、一般観光客。

一昔前の外観をもつ旅館が「昭和レトロ」として、ノスタルジックな都会人にウケているようだ。外観は古めかしいが、実は内部は変化した客のニーズにあわせ、お一人様やカップル向けにかつての大部屋を個室に改装してある。見た目の古めかしさは意図的に遺されているのだ。

「昔っばい」街並みは、目に映る姿とは裏腹に現代風に「演出」された空間である。醸しだされた「昔っばい」雰囲気はノスタルジーという最新の観光トレンドに乗っている。取り残されたような山奥の村に、時代の先端がある。

…などと、「教員っばい」感想を学生と語り合いながら、ウロウロと街歩き。

帰路、「やっぱり、行ってよかったです」と、冒頭の学生の感想。

「聖地」の靈験かも…



「レトロ」な旅館が並ぶ



通りを歩く行者

### 著者プロフィール

井戸 聡 (IDO Satoshi) 文学部 (日本文化学科) 准教授 地域社会学

■略歴：1996年、京都大学文学部文化行動学科（社会学専攻）を卒業後、1998年、同大学大学院修士課程を修了、2001年、同大学院博士課程を学修退学した後、日本学術振興会特別研究員を経て、2003年4月より愛知県立大学文学部日本文化学科に講師として奉職し、現在同大学学部学科准教授。文学博士（京都大学、2004年11月）。所属学会：日本社会学会、関西社会学会、環境社会学会。主な業績：「リゾート期における村の選択——湖西の事例から——」『観光と環境

の社会学』、古川彰・松田素二編、新曜社、2003、「地域社会の共同性の創出 ——徳島県の環境問題の経験から——」『ソシオロジ』第43巻3号、1999、「近代受容過程にみる地域社会——ある山村の近代史——」『愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編）』第53号、2005、「地域社会における巨大イベントの受容過程」『愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編）』第55号、2007など。

■これまでの／これからの研究、そして「共生」について：本学のお隣で催された万博が、「環境」というキーワードによって、その近代主義的・開発志向的性格を大いに問い直され、ふらふらと迷走しながら開催にこぎつけた万博であったように、現代のさまざまな局面で「環境」を重要で大事なものとする考え方が当たり前となっています。しかし、少し掘り下げてみると、「環境」をそのように考えることは自明なことでも、磐石な根拠のあることでもないことが浮かび上がってきます。このような事情が、いわゆる「環境問題」にみられるさまざまな矛盾や複雑さを生み出しているといえます。以上のようなことを、私はこれまでに、農山漁村での事例をもとにしながら、人間や社会が環境（特に自然環境）といかなる関係を取り結んでいるかを研究するなかで考えてきました。

その過程で、社会的文化的な条件としての「地域社会」や「都市—農山漁村」の関係、「観光」や「地域文化」についての興味を膨らませるようになり、全体的な一貫性を犠牲にしつつ、多方向へ手を延ばしてき（てしまい）ました。

そのおかげといえるのかどうかわかりませんが、最近では、以前であれば想像できなかったような「万博と地域社会」や「河川と筏流し」、あるいは「修験」といったテーマに取り組む機会にも恵まれる？ようになってきています（写真は修験の「聖地」、奈良洞川での一コマ）。

現在は働きながら観光地での生活を堪能する人々（特に若年層）の意識やホスト社会への受け入れられ方や組み込まれ方に関心を持ち、興味を抱いた学生を巻き込みながら、その実像を浮かび上がらせることを当面の課題にしていこうと考えています。

「共生」とのつながりについていえば、雑駁な興味関心に統一感を与えるひとつの考え方のヒントが「共生」ではないかと考えています。

ただし、一般的に注目されがちな見目麗しい関係、あるべき姿としての「共生」という関係だけではなく、「共生」の陰に隠れたせめぎ合いのダイナミズムや、「共生」を成立させている条件としての「強制」、あるいは「共生」の「強制」などを含み込んだものとしての、多面的・複層的・両価的な「共生」を想定しなければならないと考えています。



左列、奥から2人目